

新・福岡古楽音楽祭2017のご案内

2017年の新・福岡古楽音楽祭は、

「ピリオド楽器によるハイドン&モーツァルト～ラ・プティット・バンドを迎えて～」をテーマに10月20日(金)21日(土)22日(日)の3日間、アクロス福岡とあいにふで開催します。

室内楽コンサート

「ラ・プティット・バンド スtringカルテット」

10月20日(金) あいにふホール

出演 シギスヴァルト・クイケン(Vn)、サラ・クイケン(Vn)、マルレーン・ティアーズ(Vla)、ロナン・ケルノア(Vc)

曲目 モーツァルト:弦楽四重奏曲 イ長調 K.464 ほか

ラ・プティット・バンド

ハイドン初期のオペラ「ラ・カンテリーナ」

10月21日(土) アクロス福岡シンフォニーホール

出演 ラ・プティット・バンド

曲目 ハイドン:喜歌劇「ラ・カンテリーナ(歌姫)」、モーツァルト:交響曲 第27番 ほか

マスタークラス/古楽セミナー

10月21日(土)・10月22日(日) アクロス福岡内

講師 シギスヴァルト・クイケン(バロック・ヴァイオリン)、野々下由香里(声楽)、前田りり子(トラヴェルソ)

太田光子(リコーダー)、大塚直哉(チェンバロ)、岩田耕作(古楽アンサンブル)、安積道也(合唱)

古楽ステージ

10月21日(土)・10月22日(日) アクロス福岡内

日頃の研鑽の成果を新・福岡古楽音楽祭のステージで披露しませんか?

この情報は、2016年9月30日現在のものです。内容が変更になる場合がございます。

最新の情報は、[新・福岡古楽音楽祭ホームページ](#)でご確認ください。

新・福岡古楽音楽祭2016は以下のメンバーを中心に運営の準備を進めてきました。

村山暁、前田明子、三久保佐和子、志村聖子、中山美智子、梅津教孝、左座武彦、須佐菜々美、村岡彩子

サポーター募集中!

2017年の音楽祭に向けて、事前準備から当日運営まで通年でお手伝いを頂ける方を募集中です。ご関心がある方は、ぜひ事務局へご連絡ください。あなたの特技を活かせるチャンスです!

《お問合せ先》新・福岡古楽音楽祭事務局

福岡県福岡市中央区天神1-1-1 アクロス福岡西館2F (公財)アクロス福岡 事業部 事業企画グループ内

☐kogaku.fes@gmail.com ☎092-725-9327 ホームページ <http://www.kogaku.net/>

Fukuoka Early Music Festival 2016

新・福岡古楽音楽祭

～爛熟のパリ・ロココ～

2016年10月8日(土)～10日(月・祝)



古楽

新・福岡古楽音楽祭

会場 10/8(土) あいにふ 10/9(日)・10(月・祝) アクロス福岡

[主催]新・福岡古楽音楽祭実行委員会、18世紀音楽祭協会、福岡県、福岡市、(公財)アクロス福岡、(公財)福岡市文化芸術振興財団



ACROS Fukuoka

Contents 目次

- ごあいさつ・スケジュール 3
- コンサート
 - 10/8 室内楽コンサート テレマン in パリ
「大人気作曲家が旅先で見たもの」 4
曲目解説
 - 10/9 ストラディヴァリア・ナント・バロック・アンサンブル
「ベルサイユ宮のシンフォニー」 7
曲目解説
 - 10/10 曾根麻矢子トークコンサート「チェンバロの魅力」 9
曲目解説
- セミナー
 - 10/8・9 マスタークラス / 特別マスタークラス 10
 - 10/9・10 古楽セミナー 11
 - 10/10 チェンバロ・ワークショップ 11
- 展示・その他
 - 10/3～10 新・福岡古楽音楽祭2016 パネル展
「時代楽器～演奏会を彩る名役者たち～」 10
 - 10/8 交歓パーティ 11
 - 10/8～10 古楽器等展示・販売 11
- 古楽ステージ
 - 10/9 古楽ステージ《第1部》 12
 - 10/10 古楽ステージ《第2部》 13
- プロフィール 14

Pre-concert プレコンサート

アクロス・ランタイムコンサートvol.53

新・福岡古楽音楽祭 プレコンサート 「パリ四重奏」

10月4日(火)12:00開演

出演:寺神戸亮(バロック・ヴァイオリン)
上村かおり(ヴィオラ・ダ・ガンバ)
前田りり子(バロック・フルート)
チョー・ソンヨン(チェンバロ)



※好評のうちに終了いたしました。ご来場いただきありがとうございました。

アクロス福岡 フロアコンサートvol.423

特別編

10月6日(木)12:15開演

出演:前田りり子(バロック・フルート)
チョー・ソンヨン(チェンバロ)



※好評のうちに終了いたしました。ご来場いただきありがとうございました。

ミュージック☆ファクトリーvol.71

『目覚めた楽器たちが 騒ぎ出す』

10月8日(土)11:30～12:00

会場:コミュニケーションエリア
出演:芸工アヴァンギャルド・コンサート



ごあいさつ

皆様、ようこそ新・福岡古楽音楽祭2016にお越しくださいました。

新しい体制で再スタートして3回目となる今年の古楽祭。「爛熟のパリ・ロココ」をテーマに掲げ、18世紀のフレンチ・バロックを中心に
お楽しみいただきます。

17世紀の初めにイタリアで生まれたバロック音楽は、声楽特にオペラの誕生に代表されるように、劇的で対比を重んじる光と陰のはっきりした特徴を持っていましたが、フランスに伝わると、ベルサイユ宮殿を中心に優雅で繊細な陰影を持つフランス様式へと姿を変え、洗練された独自のスタイルを確立していきました。

あのバッハやテレマンも、イタリアとフランス、この2つの様式を大いに学び、後進国であったドイツ諸侯の宮廷に数々の名作を提供したわけですが、二人とも音楽活動は自国内に限られていました。唯一例外がバッハを凌ぐ人気作曲家であったテレマンのパリ行きです。

今回は我が国を代表するバロック・ヴァイオリン奏者、寺神戸亮氏をはじめお馴染みの名手の方々によるアンサンブルにより、テレマンが見た憧れのパリ、そして公開の演奏会コンセル・スピリチュエルになって、クーブランやブラヴェ等の室内楽をお聴きいただけます。

一方、フランスからはストラディヴァリア・ナント・バロック・アンサンブルをお招きし、ベルサイユ宮の華やかなバレエ音楽や珍しい交響曲を演奏していただきます。

折しも東日本大震災から丸5年経った今春、熊本、大分でも想定外の震災が起こりました。今回はご当地から例年にも増して、愛好家の方々がステージやセミナーへの参加申込みをいただいています。プロ、アマチュアの立ち位置を越えた交流を深め、この福岡の地から古楽を通じて九州の元気を発信できればと願っております。

新・福岡古楽音楽祭実行委員会

委員長 村山 暁

新・福岡古楽音楽祭2016スケジュール

日程	内容		時間帯	会場
10/8 土	マスタークラス(リコーダー)		13:00～14:55	あいれふ講堂(10F)
	室内楽コンサート 「テレマンinパリ～大人気作曲家が旅先で見たもの～」		16:00開演	あいれふホール(10F)
10/9 日	古楽セミナー	合唱	9:45～14:30	アクロス福岡 交流ギャラリー(2F)
		古楽アンサンブル		アクロス福岡 練習室(B2F)
	マスタークラス	バロックヴァイオリン ヴィオラ・ダ・ガンバ フラウト・トラヴェルソ リコーダー	10:00～15:25	アクロス福岡 練習室(B2F)
		チェンバロ		アクロス福岡 円形ホール(1F)
	古楽ステージ	《第1部》	13:00～15:00	アクロス福岡 コミュニケーションエリア(1F)
ストラディヴァリア・ナント・バロック・アンサンブル 「ベルサイユ宮のシンフォニー」		16:00開演	アクロス福岡 シンフォニーホール(1F)	
10/10 月祝	チェンバロ・ワークショップ「チェンバロに親しもう」		10:00～11:00	アクロス福岡 円形ホール(1F)
	古楽セミナー	古楽アンサンブル	10:30～11:30	アクロス福岡 練習室(B2F)
	古楽ステージ	《第2部》	10:30～13:30	アクロス福岡 国際会議場(4F)
	曾根麻矢子 トークコンサート 「チェンバロの魅力」		15:00開演	アクロス福岡 国際会議場(4F)

総合受付のご案内

こちらでプログラムを配布しています。

受講生、聴講生の受付はこちらで行っています。 ※聴講方法は10ページをご覧ください。

10/8 (土) 12:30～18:30 あいれふ ホワイト(10F)
10/9 (日) 9:00～15:30 アクロス福岡 円形ホール(1F)
10/10(月・祝) 9:00～16:30 アクロス福岡 国際会議場(4F)

室内楽コンサート

テレマン in パリ「大人気作曲家が旅先で見たもの」

10月8日(土)16:00開演 あいれふホール(10F)

出演：寺神戸亮・小池ユキ(バロック・ヴァイオリン) 上村かおり(ヴィオラ・ダ・ガンバ)
前田りり子(バロック・フルート) 曾根麻矢子(チェンバロ)



寺神戸亮



小池ユキ
©Guillaume Mousson



上村かおり



前田りり子



曾根麻矢子
©Shunichi Atsumi

Program

G.Ph. テレマン

Georg Philipp Telemann (1681-1767)

フルート、ヴァイオリン、ヴィオラ・ダ・ガンバまたはチェロと通奏低音のための
6つの組曲からなる新しい四重奏(パリ四重奏曲) 第1番 二長調

Nouveaux Quatuors en Six Suites à une Flûte Traversière, un Violon, une Basse de Viole, ou Violoncelle, et Basse Continué (Paris Quartets)
Premier Quatuor en Ré majeur
Prélude (Vivement) - Tendrement - Vite - Gayment - Modérément - Vite

A. フォルクレ

Antoine Forqueray (1671-1745)

組曲 4番 ト短調から「パッシーの鐘」-「ラトゥール」-「パッシーの鐘」(ガンバ)

IVe Suite en sol mineur "Le Carillon de Passy - La Latour - Le Carillon de Passy" (Viole)

組曲 1番 ニ短調から「フォルクレ」(チェンバロ)

Ire Suite en ré mineur "La Forqueray" (Clavecin)

M. ブラヴェ

Michel Blavet (1700-1768)

フルート協奏曲 イ短調

Concerto en la mineur pour flûte
Allegro - Gavotte Tendrement - Allegro

休憩

J-M. ルクレール

Jean-Marie Leclair (1697-1764)

2つのヴァイオリンと通奏低音のための序曲 Op.13-5 イ長調

Ouvertures en Trio Op.13-5 en La majeur
Ouverture - Andante - Allegro

A. フォルクレ

Antoine Forqueray (1671-1745)

組曲 2番 ト長調から「ルクレール」(ガンバ)

IIe Suite en Sol majeur "La Leclair" (Viole)

組曲 1番 ニ短調から「クーブラン」(チェンバロ)

Ire Suite en ré mineur "La Couperin" (Clavecin)

F. クーブラン

François Couperin (1668-1733)

コンセール「リュリ賛」(比類無きリュリ氏の永遠の思い出に)

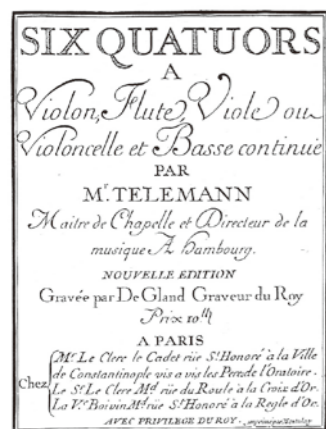
Concert instrumental sous le titre d'Apothéose Composé à la mémoire immortelle de l'incomparable M. de Lully

- リュリがエリジアの野で詩の聖霊(ミューズ)たちと音楽を奏でている
Lulli aux Champs-Elysées concertant avec les ombres lyriques
- リュリとミューズ達のエール
Air pour les mêmes.
- アポロがここに降りてくると告げるためにエリジアの野に飛んでくるマーキュリー
Vol de Mercure aux Champs-Elysées, pour avertir qu'Apollon y va descendre
- リュリにヴァイオリンを授け、パルナッス山に彼の場所を与えるために、降りてくるアポロ
Descente d'Apollon qui vient offrir son violon à Lulli et sa place au Parnasse
- リュリと同時代の作曲家たちから起こる地底からのつぶやき
Rumeur souterraine, causée par les auteurs contemporains de Lulli
- フルートまたは非常にひそやかな音のヴァイオリンで奏でられる、それらの人々の嘆き
Plaintes des mêmes pour des flûtes ou des violons très adoucis
- パルナッス山へと連れ去られるリュリ
Enlèvement de Lulli au Parnasse
- コレリとイタリアのミューズたちによるリュリへの優しく懇懇無礼な歓迎
Accueil entre doux et agard, fait à Lulli par corelli et les Muses italiennes
- リュリのアポロへの感謝
Remerciement de Lulli à Apollon
- アポロはリュリとコレリに、フランス趣味とイタリア趣味の融合こそが音楽を完璧なものにするに違いない、と説得する
「序曲の形式による試奏」-リュリとフランスのミューズたち-およびコレリとイタリアのミューズたち
Apollon persuade Lulli et Corelli, que la réunion des goûts français et italien doit faire la perfection de la musique.
Essai en forme d'ouverture - Lulli et les muses Française, Corelli et les muses Italiennes
- 軽快なエール-リュリが主題を演奏し、コレリが伴奏する
Air léger pour deux violons: Lulli jouant le sujet et Corelli l'accompagnant
- 第2のエール-今度はコレリが主題を演奏し、リュリが伴奏する
Second air: Corelli jouant le sujet à son tour que Lulli accompagne
- パルナッス山での和解 彼らの言葉ではバラード、セレナードなどと発音されるごとく、これからはソナード、カンタードなどと言うことを条件としたフランスのミューズ(詩の神)たちの提案をもとに成立したトリオソナタ形式によるソナード 重々しく-奔るように-鷹揚に-活発に
La Paix du Parnasse, faite aux conditions, sur la remontrance des Muses françaises, que lorsqu'on y parleroit leur langue, on dirait dorénavant Sonade, Cantade, ainsi qu'on prononce Ballade, Serenade, etc.
Sonade en trio Gravement - Saillie - Rondement - Vivement

※諸事情により記載内容が変更になることがありますので予めご了承ください。

テレマンの見たパリ

もう随分前のこととなりますが、パリに住んでいるチェンバリストのクリストフ・ルセの家で、テレマンのパリ四重奏曲をリハーサルしたことがあります。その時「テレマンはパリに滞在中の辺に泊まっていたんだよね、もしかしたらこのアパートだったかも!？」と話してくれてちょっと興奮しました。パリ四重奏の楽譜の最初に、テレマン自身はテンプル広場(Place du temple)の役所の向かい側にあるチェンバロ製作家の家に滞在、と書いてあります。



クリストフのアパートは、ちょうどその位置にありました。ギシギシいう木造の階段を上がりながら、「テレマンもここを歩いたのかも!」と思いました。フランス音楽を愛し、パリに来る何年も前からフランス様式を勉強していたテレマンが、現在の私たちもそうすることがあるのと同じように、見知らぬ土地でチェンバロの工房を訪ね、そこに泊めてもらい、わくわくしながら携えてきたパリ四重奏をブラヴェエやフォルクレの息子と一緒に弾いた、という事実がとても身近に思えます。

そこからそう遠くはないパリ市役所の近くに、パリ4区のサン＝ジェルヴェ教会があり、フランソワ・クーブランはそのオルガニストでした。現在でもその裏の方にリセ・クーブランという高校があり、わたしはそこで生徒達に公開リハーサルをしたことがあります。

さて今回、この博多でのコンサートのプログラムのアイディアを練っていたころ、わたしたちのテレマンのパリ四重奏のCDが発売されることが決まりました。さらに、タイミングのよいことに、長年その存在を知られながらも失われたと思われていた『ガンバのための12曲のファンタジー』が発見され、今年新しく楽譜が出版されたのです!

まさに私たちにとっては、テレマン・イヤーとなったわけですね。

この『ガンバのためのファンタジー』が書かれたのが、テレマンがジャン・バティスト・フォルクレに会う10年前。もしパリでそれをこのガンバの名手に献呈したとしたら、その影響を受けてフォルクレが自分の曲集を、父であるアントワヌ・フォルクレの名の下に出版した可能性もあり、ガンバ奏者にとって宝のようなフォルクレの5つの組曲が、父と息子のどちらの作曲によるものなのかも含めて、わたしたちガンバ奏者の間では特にわくわくするホットな話題となっています。

さて、あこがれのパリに滞在したテレマンが共演したのは、その息子の方のフォルクレ、それからトラヴェルソ奏者のミッシェル・ブラヴェエ、ヴァイオリン奏者のジャン＝ピエール・ギニョン、チェロ奏者のプリンス・エドワルド。コンセール・スピリチュエルというコンサートのシリーズに出演していたメンバーです。

ブラヴェエは詩人のヴォルテールにも絶賛されていましたし、トラヴェルソは音程が不安定という常識を覆し、完璧な音程で演奏したと言われています。(その生まれ変わりなのか、私たちの共演者前田りり子さんも、ヴィルトゥオーゾ、かつリリック(詩的)な奏者です)左利きだったチャーリー・チャップリンが右にヴァイオリンを持ち、左手で弓を持って弾いた話は有名ですが、ブラヴェエも左利きで、左側にフルートを吹いたことも知られています。ドイツのクヴァンツとも親交がありましたし、ヨーロッパ中のフルート奏者の模範となったと言われていたから、テレマンもブラヴェエとの出会いを心待ちにしていたに違いありません。

一方ヴァイオリンを担当したギニョンも相当なヴィルトゥオーゾでしたが、今回のプログラムではこのギニョンではなく、同じくコンセール・スピリチュエルの仲間であり、ヴァイオリン楽派の創始者と言われる先輩、ジャン＝マリー・ルクレールの曲を選びました。圧倒的な技巧で「悪魔のように弾く」と称された同世代のイタリアのヴァイオリンの名手ロカテッリに対し、ルクレールはそのリズムの自由さや、音色の美しさが聴衆の心を打つところから、「天使のように弾く」と賞賛されていました。これはガンバの名手マラン・マレが「天使のように弾く」、そしてアントワヌ・フォルクレが「悪魔のように弾く」と称されたのと同じですね。

ルクレールの音楽は、ヴァイオリンの魅力を生分に発揮し、常に技巧的ですが、それだけではなく美しいメロディーと豊かで斬新なハーモニーに彩られ、バスの旋律も緻密に書き込まれていて芸術性の高いものです。イタリ

アのヴィヴァルディが協奏曲の様式を確立し、コレリがソナタの様式を確立して以来、ヨーロッパ中の作曲家が彼らの様式を模倣し、さらにより作品を作ろうと試みましたが、ルクレールは其中で彼らのイタリア様式にフランス的エスプリを加え独自のスタイルを生み出した数少ない例と言えるでしょう。その名声は彼の演奏や作品だけにとどまらず、持っていたヴァイオリンまでもルクレールのストラディヴァリウス!として賞賛されたものですが、その人生の最後は悲しいかな、2度目の離婚の後、何者かによって暗殺されてしまったのです!

さてテレマンは、パリの奏者達に尊敬の念を表すためでしょうか、それぞれの楽器のためには、存分にその技術の見せ場を作っていますが、自分が担当したチェンバロパートだけは、実に地味に伴奏する役割に徹しています。テレマンは、音楽家になることを家族に反対され続けたにもかかわらず、音楽家であることを止められなかった、音楽の申し子です。あこがれのパリで、フランスのヴィルトゥオーゾ奏者達の伴奏で満足していた、なんとなく人のいい顔が浮かびますが、実際はどんな人柄だったのでしょうか。ちなみにブラヴェエは礼儀正しく謙虚な好人物だったことが知られています。

そしてテレマンがパリに着いた時にはすでに亡くなっていましたが、その滞在先の近所に住んでいたフランソワ・クーブランの作品からは、『リュリ賞』を選びました。テレマンは先に書きましたように、パリに来る何年も前からフランス音楽、特にリュリの音楽をじっくり勉強し、フランス様式の歌曲もたくさん作曲していました。さらに、パリ四重奏曲を、F.クーブランの『Goût réuni』(趣味の統合)に影響を受けて作曲したとも言われています。

クーブラン自身もリュリとコレリを大変尊敬し、フランス様式とイタリア様式の融合を試みました。控えめで謙虚だった人柄のせい、作曲家の頂点とされたオペラの作曲家にはなれませんでした、バッハと並ぶ大作曲家という過言ではないでしょう。

パリの空に毎日響いていた教会の鐘の音、そしてテレマンが影響を受けた、また出会ったフランスの音楽家達。

今でも魅力的な街パリは、テレマンの時と同じ風景をここに残し、当時の景色を垣間見ることができます。

では、テレマンの視線を通して、フランス音楽を存分にお楽しみください。

ストラディヴァリア・ナント・バロック・アンサンブル 「ベルサイユ宮のシンフォニー」

2016年10月9日(日)16:00開演 アクロス福岡 シンフォニーホール(1F)

出演: ダニエル・キュイエ(指揮、バロック・ヴァイオリン)

Daniel Cuiller - Violon Directeur de l'ensemble Stradivaria

ストラディヴァリア・ナント・バロック・アンサンブル

Stradivaria Ensemble Baroque de Nantes

Program

J.F.ルベル

Jean-Féry REBEL (1666-1747)

バレエ音楽「田園の楽しみ」

Les Plaisirs Champêtres

バレエ音楽「四大元素」

Les Elémens "Symphonie nouvelle"

- | | |
|-----------|----------------------------|
| カオス<混沌> | Le Chaos |
| <地と水> | La Terre et l'Eau |
| シャコンヌ<火> | Le Feu - Chaconne |
| さえずり<大気> | L'Air - Ramage |
| ナイチンゲール | Rosignols |
| タンブーラン | Tambourins |
| シシリエンヌ | Sicilienne |
| ロンドー<愛の歌> | Air pour l'Amour - Rondeau |
| カプリス | Caprice |



F.フランクール

François FRANCOEUR (1698-1787)

ロイヤルフェストのための交響曲 1773 (アルトワ伯の王室祝典に寄せるサンフォニー)

Simphonies pour le Festin Royal de Monseigneur le Comte d'Artois

- | | |
|-----------|------------------|
| 序曲 | Ouverture |
| 優美なエール | Air gracieux |
| メヌエット | Menuets 1 & 2 |
| ガヴォット | Gavottes 1 & 2 |
| 快活なエール | Air vif |
| 甘美なエール | Air doux |
| 軽やかなガヴォット | Gavottes légères |
| シャコンヌ | Chaconne |

フランスの管弦楽組曲とバレエ

美しいフランス語と躍動感あふれるバレエ、そして色彩豊かなオーケストラ——フランス・バロック・オペラは、同時代のイタリア・オペラとは大きく違っていました。その背景には、国王ルイ14世が踊りを好んでいたことがあります。映画《王は踊る》(2000年、コルビオー監督)で描かれているように、ルイ14世は少年の頃から舞踏会やバレ・ド・クール(宮廷バレ)の舞台上で踊っていました。

ジャン＝バティスト・リュリ(1632-87)が国王のお気に入りの音楽家になったのも、舞台上で一緒に踊ったことが最初でした。その後リュリは、宮廷音楽総監督となり、フランス・バロック・オペラを創り出します。当時のオペラ劇場は、国王の住むルーヴル宮殿(現在の美術館)のすぐそば、パレ・ロワイヤルの一角にありました。この劇場には専属オーケストラがあり、入団するにはリュリによる厳しい試験があったそうです。その結果、ダンゲルペール、マラン・マレ、オテール一族など、国王の宮廷で活躍していた奏者がそろっていました。

1682年にルイ14世は、パリから20キロほど離れたヴェルサイユに宮廷を移しました。その頃から、パリの音楽事情が大きく変化していきます。同時代のロココ絵画を思わせる標題付きの小曲が増えていくとともに、イタリアの新しいソナタ(ヴァイオリン音楽)や声楽曲(カンタータ)が現れます。

また、伝統的なフランス・バロック・オペラでは、バレエがますます重要な位置を占めるようになりました。アンドレ・カンブラ(1660-1744)は、当時パリのノートルダム大聖堂の楽長でしたが、匿名でオペラ・バレ《優雅なヨーロッパ》を発表します。この作品が大評判となり、彼は辞職してオペラに専念します。人気の秘密は、劇よりもバレエ場面が中心を占めていたことにありました。

ルイ15世の時代になると、パリのオペラ劇場では、女性の優れた踊り手が次々と登場し、喝采をあびます。同じ頃パリに公開演奏会コンセール・スピリチュエルが創設され、フランスばかりでなく外国からも音楽家が腕を競う場所となりました。

本日演奏される、ルベルとフランクールの作品は、このような時代にヴェルサイユの宮殿、そしてパリのオペラ劇場や公開演奏会で演奏されていた音楽です。

ジャン＝フェリ・ルベル:バレエ音楽

《田園の楽しみ》、《四大元素》

ジャン＝フェリ・ルベル(1666-1747)は、パリの音楽家一族に生まれ、8歳で優れた音楽の才能を示し、リュリに師事してヴァイオリンと作曲を学びました。その後、パリのオペラ座オーケストラやヴェルサイユの宮廷楽団のヴァイオリン奏者となり、さらには姉と結婚した宮廷音楽総監督ミシェル＝リシャル・ドラランド(1657-1726)や息子のフランソワ(1701-1775)とともに、宮廷で活躍しました。

ルベルは、フランスでヴァイオリンのためのソナタ曲集(1712,1713)を出版した最初期の作曲家のひとりでした。さらに重要なのは、今日のバレエのように、踊りのために書かれた舞台音楽です。《舞踏さまさま》(1725)は、マリー＝サレがロンドンで踊った時、ヘンデルがオーケストラを指揮していました。そして翌年には別の女性ラ・カマルゴが踊り、観客を魅了します。

《田園の楽しみ》(1734)は、どのような機会に踊られたか不明ですが、田園風の舞曲が並んでいます——ミュゼット、ガヴォット、シャコンヌ、パスピエ、ブーレ、リゴドン。なお、冒頭のミュゼットは、バグパイプのような楽器の名称で、美しい絹の袋で覆われ、腕を動かして風を送り、ひとつの笛で旋律を、もうひとつの笛で持続低音を鳴らします。

《四大元素》(1737-38)は、楽譜の表紙に「新しいサンフォニー」と記載されています。サンフォニーとは、当時のフランスでは器楽合奏や管弦楽曲を意味していました。冒頭の衝撃的な「混沌」は、ルベル自身の序文によれば、「四大元素の混沌という着想に和声の混沌とを組み合わせ」[オクターブ内の音をすべて一度に鳴らそうと試みた]曲でした。それは、200年ほど後のストラヴィンスキーのバレエ音楽《春の祭典》(1913)を思わせます。

混沌の中から、《四大元素》が現れます——低音楽器による大地とフルートによる水(ルール)が現れ、ヴァイオリンによる火(シャコンヌ)、大気(鳥のさえずり、夜鳴ウグイス)。その後には、狩猟を告げるルール、陽気なタンブーラン、優雅なシシリエンヌ、愛の神のためのエール(ロンドー)と続き、最後は華やかなカプリスで締めくくられます。

フランソワ・フランクール:

《アルトワ伯の王室祝典に寄せるサンフォニー》

フランクールは、音楽家一族の出身で、ヴァイオリニストの父親から手ほどきを受け、12歳の時にはもうオペラ座オーケストラで演奏し、すぐに宮廷楽団のメンバーとなりました。そして1720年、22歳の時、ヴァイオリン・ソナタ集第1巻を出版しています。それから3年後、フランクールは、同じくヴァイオリン奏者でオペラ座の同僚でもあった友人のフランソワ・ルベル(上記ルベルの息子)とともに、ブラハとウィーンを訪れ、当時の最新流行の音楽に触れています。

フランクールとルベルは、帰国後45年以上にもわたって一緒に活動を続けました。ふたりの名前で発表された数々のオペラ(《ピラムとティスベ》など)は、どの部分がどちらの作か、当時から明らかにされていません。ふたりがオペラ座の支配人や総監督をつとめていた頃には、イタリア・オペラとフランス・オペラの優劣をめぐるブフォン論争が勃発し、J.-J.ルソー(1712-78)やジャン＝フィリップ・ラモー(1683-1764)が激しく対立しました。論争が落ち着いた頃、今度はオペラ座が火事で焼けてしまいます。以後フランクールは、パリのオペラ界から身を引き、宮廷音楽総監督となり、1764年には音楽家としては異例のことに、ルイ15世から貴族に列せられています。

《アルトワ伯の王室祝典に寄せるサンフォニー》は、1773年、国王ルイ16世の弟アルトワ伯とサヴォワ公女の結婚のために作曲されました。アルトワ伯は、ナポレオンの後の王政復古で国王シャルル10世となった人物です。結婚式はヴェルサイユ宮殿の王室礼拝堂でおこなわれ、その後、宮殿の広間で盛大な祝宴が夜遅くまで続けられました。この祝宴には、3年前に王太子ルイ(後のルイ16世)と結婚していたマリー＝アントワネットも加わっていたことでしょう。

祝宴の音楽は、75歳の宮廷音楽総監督フランクールが采配をふるいました。このような機会には、ドラランドの《国王の晩餐のためのサンフォニー》のような、フランス風の管弦楽組曲を演奏するのが慣例でした。フランクールのサンフォニーも、この伝統に従って、序曲で始まり、さまざまな舞曲や人気のあったオペラからの抜粋で構成されていました。そのなかには、フランクール自身の作品ばかりでなく、他の作曲家の作品の編曲も含まれています。

本日演奏される音楽は、指揮者ダニエル・キュイエ自身が独自に選り出し、ト長調/ト短調の管弦楽組曲にまとめたものです。最初は序曲で、次に優雅なエール、2つのメヌエツ、ガヴォット、優雅なロンドー、活気あるエール、優しいエール、軽快なガヴォット(モンドンヴィル作)、陽気なロンドーと続き、最後は[ペルトン氏による]シャコンヌで終わります。

曾根麻矢子トークコンサート 「チェンバロの魅力」

2016年10月10日(月・祝)15:00開演 アクロス福岡 国際会議場(4F)

出演: 曾根麻矢子(チェンバロ)

Program

J.S.バッハ: 前奏曲 変ロ長調(平均律クラヴィーア曲集第1巻 第21番 BWV866から)

G.F.ヘンデル: パッサカリア ト短調(組曲第7番 HWV432から)

D.スカルラッティ: ソナタ イ長調 K.211、ソナタ イ長調 K.212

J.P.ラモー: ミューズたちの語り、一つ目の巨人

J.デュフリ: ラ・フェリクス、ラ・ダマンジ

A.L.クーラン: アルルカン、またはアダム

J.N.P.ロワイエ: 敏感、スキタイ人の行進

※諸事情により記載内容が変更になることがありますので予めご了承ください。

Program Notes 曲目解説

曾根麻矢子

福岡の皆様こんにちは。本日のご来場を心より感謝申し上げます。

普通ならばここでは曲解説をお読みいただくものかもしれませんが、今日はトークコンサートですので、喋りながら演奏曲目を進めることにし、ここにはショートエッセイを書くことにしました。たぶん死ぬまで質問され続ける「チェンバロを始めたきっかけは?」について。

まずは「初めてチェンバロに触れた日のこと」。それは高校2年生の4月。桐朋のチェンバロが置いてある221という小さなレッスン室でした。待ちに待ったその日、故鍋島元子先生の見守る中、初めてその鍵盤に触れる時が来たのです。なんと感動の一瞬!そして人生を変えた一瞬!「この楽器こそ自分が弾くべき楽器!ピアノよ、さらば!」と心の中で叫び、メラメラ燃え上がる炎が自分の中に生まれました。

「何がそんなに良かったのか?」当然そう質問されるわけですが、これがまたお答えづらい。あなたが恋におちたその時、相手のどこにそれほどまで惚れたのか?と聞かれて答えられますか?何か強烈にビビビッと感じて、絶対コレ!コレ以外のものは私には必要ない!自分の感覚に間違いはない!と思ったりしませんか?

人生52年も生きていってそんな経験の数回はあったかもしれませんが(謎です)これだけは間違いではなかった。これだけは(笑)。

それが私の人生をいつも刺激し、あるいは心に静寂をもたらしてくれるパートナー、チェンバロ君です。「え?男性だったの?」って・・・当然です。「un clavecin」男性名詞ですよ。と、ここまで読んで下さり、「あら?ソネマヤコってなんだかイメージと違うわ～」と思われる方もおられるかもしれませんが、喋るとイメージが違うとよく言われますが、何故だかわかりません。

話をチェンバロに戻しましょう。ここからは、チェンバロを始めたきっかけです。

私が桐朋の高校のピアノ科に入学した頃、ピアノのレッスンでバッハの平均律第1巻が課題にされていました。バッハの曲はレパートリーの中でもいちばん好きでしたし、高校に入り、更に厳しくなったレッスンの中で、どんどんバッハにのめり込んで行きました。桐朋という環境で、ヴァイオリンの友達のシャコンヌを聴いたり、演奏会に出かけて管弦楽組曲を聴いたり、あるいは図書館で様々なバッハの楽曲のレコードを聴いたり・・・そんな高校生活で、自分の興味がバッハ一点へ向けられて行った時期です。その興味の行き着く先にあった物は? それがチェンバロです。

ピアノで平均律を弾くのは、他のどの作曲家の作品よりも面白い。けれども何かが違う様な気がする。その疑問はもしかしてチェンバロという楽器を弾いてみたら解けるのではな

いだろうか? そう思ったとたんにチェンバロに触ってみたいって仕方ない気持ちが溢れてきました。

大学にあるチェンバロに触る手段はたったひとつ。副科でチェンバロを選択することで。高校2年に進級した時に、待ってました!とばかりに副科の希望を出しました。第1希望チェンバロ第2希望チェンバロと書いて・・・そこには想像していなかった返事が来たのです。

「ピアノ科の高校生がチェンバロ副科を履修した例がないので、ダメです。チェンバロ以外の楽器に下さい」と!!

「やだ、やだ〜!絶対やりたい!誰が何と言おうとやりたいんです!」担任、ピアノの先生、両親、そして最後は鍋島先生へ直談判。果たして、私の粘り勝ち。希望が叶うことになったわけです。

曾根麻矢子のチェンバロ馴れ初めストーリーいかがでしたか?あれから約35年が経ち、高校2年生の生徒を教える度に、我が青春の情熱時代を懐かしく思い出します。

今日のコンサートは、チェンバロにとって大き過ぎる空間に違いありません。又、チェンバロという楽器は1台1台非常に音色が異なります。

お客様方が、今後も様々なシチュエーションでチェンバロ音楽に触れ、またご興味のある方が楽器に触れるチャンスがございましたら、願っております。

どうもありがとうございました。



©Shunichi Atsumi

マスタークラス

マスタークラス(受講のみのコース)
特別マスタークラス(講師との共演コース)

10月8日(土)13:00~14:55 あいれふ講堂(10F)

10月9日(日)10:00~15:25 アクロス福岡 練習室②~⑤(B2F)・円形ホール(1F)

講師：寺神戸亮(バロック・ヴァイオリン) 上村かおり(ヴィオラ・ダ・ガンバ)
前田りり子(フラウト・トラヴェルソ) 太田光子(リコーダー) 曾根麻矢子(チェンバロ)

※講師のプロフィールは14~15 ページをご参照ください。

講師のテクニックや独自の教授法を間近で見学をすることができる公開レッスンです。今回は全5コースを開講しています。

マスタークラス 講師との共演コースレッスン アンサンブルレッスン

10/8	あいれふ講堂	10/9	練習室2	練習室3	練習室4	練習室5	円形ホール
講師	太田光子	講師	前田りり子	寺神戸亮	上村かおり	太田光子	曾根麻矢子
13:00 ~13:55	リコーダー 山田夕子 山本香代子	10:00 ~10:55	② トラヴェルソ 土田ふみ 藤原みか	③ ヴァイオリン 廣末真也・黒沼千比呂 為国健太・西野展一朗	ガンバ 布施久美子	リコーダー 吉田陽子	チェンバロ 近江宏
14:00 ~14:55	リコーダー 野田よう子	11:00 ~11:55	トラヴェルソ 南方佳子 中野洋子	ヴァイオリン 相内俊一 近江宏・布施久美子	ガンバ 河本基實	リコーダー 瀬部香織 坂田ますみ	チェンバロ 藤崎都代子
		11:55~12:30			休憩		
		12:30 ~13:25	④ ⑤ トラヴェルソ 吉岡充弘・布施久美子 近江宏・前田りり子	ヴァイオリン 林内美織 中野洋子	ガンバ 吉田一美	リコーダー 高橋真千代	チェンバロ 明石拓爾
		13:30 ~14:25	⑥ ガンバ 瀬部香織 城輝昭・坂田ますみ	ヴァイオリン 亀之原佑介 海老原麻衣		リコーダー 藤原佐保子	チェンバロ 小田部陽子
		14:30 ~15:25	⑦ ガンバ 西野展一朗 上村かおり	⑧ ヴァイオリン 牧原由依 寺神戸亮			チェンバロ 中野洋子

《聴講の申し込み方法とご注意》

上記の講座はどなたでも聴講いただけます。但し当日の受付が必要です。下記ご一読の上、総合受付へお越しください。

【申込方法】

1. 総合受付で聴講申し込み手続きの上、名札とアンケートを受け取ってください。
2. 受付の時間は、8日 12:30~ / 9日 9:30~です。
3. 該当の部屋へお越しください。会場の入室は5分前より可能です。スタッフの指示に従って行動してください。
4. セミナー会場では名札を必ず着用してください。後ほど申込票との照合を行いますので、お手数ですが、各会場でも必ず提示をお願い致します。
5. 聴講終了後は、アンケートと名札を返却ください。

【注意】

- 定員に達し次第、受付は終了します。
 - 部屋のサイズや受講生数により、聴講生の受付人数が異なります。
1. 会場での飲食、蓋のない飲み物の持込は厳禁です。
 2. 入室前に携帯電話を機内モードまたは、電源をオフに設定してください。
 3. 講義の撮影・録音は厳禁です。
 4. セミナー会場以外のフロア・部屋等への入室はご遠慮ください。
 5. 1クラス55分間です。この間、レッスンの妨げとなるため、入退室はできません。予めご了承ください。
 6. セミナーでは記録用に写真・ビデオ撮影を行う場合がありますので、ご了承ください。

聴講無料
総合受付で
申し込みが必要です

古楽セミナー [合唱コース]

10月9日(日)9:45~14:30 アクロス福岡 交流ギャラリー(2F)

講師：安積道也 課題曲：「レクイエム」 1. グレゴリオ聖歌 2. ビクトリア

参加者名
および
パート

[ソプラノ] 飯尾幸子、石橋ゆつき、井上ともか、大原陽子、小野真弓、川添千佳子、鈴木紀子、武田葉子、田上朝子、中島貴子、中島田良子、林田一枝、平山安世、宮木春、森山紀子、山下美和、余瀬晶子
[アルト] 石川温子、岩熊真由美、内山田瞳、梶原敦美、久代菜未、久保純子、堺亜希子、杉本佳代、高橋和加子、長野智恵、平井佐和子、松村抄子、三木里花、緑川博子、山本春帆、山本洋子、余田緑
[テナー] 井崎壽、徳丸良康、深堀純、宮内清見、宮原淳、山本充児 [バス] 安西博之、石川正文、小郷慎太郎、原田研、深堀伸一、松村俊哉

聴講無料
総合受付で
申し込みが必要です



古楽セミナー [古楽アンサンブルコース]

10月9日(日)9:45~14:30 10月10日(月・祝)10:30~11:30

アクロス福岡 練習室1(B2F)

講師：岩田耕作

課題曲：オラーツィオ・ヴェッキ「慰めの森」または「多様な気晴らしの名作集」(1590年)より

(Orazio Vecchi, 1550年-1605年) Selva di Varia Ricreazione

1. 私はその時を知っている (So ben mi ch'ha bon tempo)
2. 行きましょう、ニンフたち (Gittene Ninfe)
3. サルタレッコ (Saltarello)
4. ヒュメナイオスよ、それが真実なら (Se gli e vero, Himenea)
5. 眠らないでティリドラー (Tiridola non dormire)
6. みんな楽しもう (Gioite tutti)

聴講無料
総合受付で
申し込みが必要です



©studio-mickey

2日間完結のセミナーです。ここで創り上げた音楽を、10日の古楽ステージで披露します。どうぞお楽しみに！

参加者名
および
パート

[ヴァイオリン] 廣末真也、相内俊一、岩田悠花、小川久美、椋原典子、亀之原佑介 [ヴィオール] 城輝昭 [チェロ] 岩崎二郎、為国健太、白濱茂樹、白濱美佐子 [リュート] 宮園智子 [ルネサンスフルート] 藤原みか [リコーダー] 阿部等、大喜多陽子、小阪和子、野田よう子、山根淳子 [チェンバロ] 飯倉春佳、財津花津美 [ソプラノ] 市橋なぎさ、大井このか、酒井寿喜、田中美和子、中山美智子、芳賀史江、藤原佐保子 [テナー] 堤頭紘、長野公宣 [バス] 上野目孝之、梶原捷聖

チェンバロ・ワークショップ 「チェンバロに親しもう！」

聴講無料
総合受付で
申し込みが必要です

10月10日(月・祝)10:00~11:00 アクロス福岡 円形ホール(1F)

講師：曾根麻矢子(チェンバロ)

参加者と体験曲 矢古島 慎成(小3) バッハ：インベンション 第8番 ヘ長調 B.W.V.779
河原田 暁(小6) バッハ：シンフォニア 第11番 ト短調 B.W.V.797
武居 佳花(中2) バッハ：平均律クラヴィア集 第1巻 より 第10番 ホ短調 B.W.V.855



DUNS TEW DAVID J. RUBIO 1971

これまで鍵盤楽器のお稽古はしてきたけれど、チェンバロを弾くのは初めて…という3人の参加者に体験してもらいます。

古楽器等展示・販売

この音楽祭では作曲当時に使用されていた楽器、または忠実なコピーで演奏されています。その中から、実際に製作されている製作者の方々に楽器をお持ちより頂きました。貴重な機会ですので、ぜひのぞいてみてください。

中嶋弦楽器工房(バロック・ヴァイオリン 他)、鈴木楽器製作所(リコーダー)、フラウトラヴェルソワークショップ福永(トラヴェルソ)、バロック木管図書館woodwind(バセット・ホルン 他)、中村ピアノ工房(チェンバロ)、ローランド株式会社(電子チェンバロ)、タワーレコード(CD、DVD、楽譜 他)

10/8(土)	10/9(日)	10/10(月・祝)
あいれふホワイエ(10F) 13:00~18:00	アクロス福岡 円形ホールロビー(1F) 10:00~14:30	アクロス福岡 国際会議場ロビー(4F) 10:00~16:00

★交歓パーティ★

※参加受付は終了しました。当日の受付はございませんのでご了承ください。

10月8日(土)19時開宴 ウォーターサイト・オットー(毎日新聞会館1F)

音楽祭初日の夜にお食事とお酒を囲んで、アーティストや同行の仲間と共に語りあうチャンスです！

総合受付のご案内

受講生、聴講生の受付はこちらで行っています。

10/8 (土) 12:30~18:00 あいれふ ホワイエ(10F)
10/9 (日) 9:00~15:30 アクロス福岡 円形ホール(1F)
10/10(月・祝) 9:00~16:30 アクロス福岡 国際会議場(4F)

展示

新・福岡古楽音楽祭2016パネル展

「時代楽器～演奏会を彩る名役者たち～」

10月3日(月)~10日(月・祝)10時~18時(最終日は16時まで)

アクロス福岡 コミュニケーションエリア(1F)

時代とともに変化していく楽器をパネルで紹介しています。



Profile プロフィール

M マスタークラス講師 S セミナー講師 C コンサート

安積 道也 (オルガン) Michiya Azumi

フライブルク国立音楽大学にてドイツ国家資格教会音楽家最高位(カントール)取得。在独中ギンタースタール聖マリア教会音楽監督。2009年より西南学院音楽主事。指揮者・オルガニストとして、国内外で演奏や指導を行っている。グレゴリオ聖歌を橋本周子、G.ヨッピヒ、B.シュミットに、合唱指揮をM.シュルト・イエンセンの各氏に師事。エリザベト音楽大学非常勤講師。西南学院オラトリオ・アカデミー常任指揮者。



S

岩田 耕作 (チェンバロ) Kohsaku Iwata

6歳のときに失明。7歳よりギターを、14歳よりピアノを始める。この頃から古楽に興味を持ち、15歳よりリュート、17歳よりチェンバロを始める。筑波大学付属盲学校高等部音楽科を卒業後ヨーロッパに留学。ブリュッセル王立音楽院にてチェンバロと室内楽のプルミエ・プリ、ストラスブル音楽院にてチェンバロと作曲法の金賞を受賞。現在、楽器演奏と共に、専門分野である音楽理論や作曲法の知識を生かした演奏解釈による、器楽、声楽、各種アンサンブル、合唱などの指導、コンサートの企画を行っている。ハルモニエ・セレスト代表。



S

上村 かおり (ヴィオラ・ダ・ガンバ) Kaori Uemura

上野学園、ブリュッセル王立音楽院を首席で卒業。ヴィオラ・ダ・ガンバを大橋俊成、ヴィーラント・クイケン各氏に師事。これまでに、ベルギー、フランスを拠点とし、リチェルカール・コンソート、ル・ポエム・アルモニク、レザール・フロリッサン、レ・タラン・リリック、またオランダのバッハ協会、ドイツのカントウス・ケルンなどと共演、アンサンブル奏者として仲間からの信頼も厚い。更には、アムステルダム・コンセルトヘボウオーケストラから毎年バッハの受難曲のソリストとして招聘されるなど、ヨーロッパの第一線で活躍している。近年は第一トブレ奏者としてヨーロッパ各地、アメリカからも招聘されるなど、活動の幅を広げている。東京で率いるロイヤルコンソートの、イギリス音楽を中心とした演奏会にも定評がある。ブリュッセル在住。



M C

太田 光子 (リコーダー) Mitsuko Ota

上野学園大学卒業、ミラノ市立音楽院卒業。第16回国際古楽コンクール<山梨>第一位。故G.ボッセの指揮神戸市室内合奏団客演、H.リング指揮シュトゥットガルト・バッハ・コレギウムに参加。“Arcomelo”にソリストとして参加、表現力と高度なテクニックにおいて高い評価を得て、イタリアのレーベル「ラ・ボッテガ・ディスカンティカ」よりCD「ヴィヴァルディ/リコーダー協奏曲」を2013年にリリース。リコーダーを山岡重治、ペドロ・メメルスドルフの両氏に師事。現在上野学園大学講師。



M

小池 ユキ (ヴァイオリン) Yuki Koike

モダン・ヴァイオリンを日本とリオンで学んだあと、バロック・ヴァイオリンをオランダのデン・ハーグ王立音楽院で学ぶ。シギスヴァルト・クイケン氏、エリザベト・ウォルフフィッシュ氏、寺神戸亮氏、ルイス・オタヴィオ・サントス氏に師事。2000年にパリ国立高等音楽院の大学院演奏家コースに入学し、フランソワ・フェルナンデス氏に師事。現在フランスに在住し、レ・タロン・リリック、ラ・プティット・バンド、ル・コンセル・ダストレー、ラ・ジャンブル・フィルハーモニック・リチェルカール・コンソート、イル・ガルデリーノなど、ヨーロッパの古楽オーケストラ、アンサンブルと定期的に演奏している他、ソリストとしても幅広い活動を行っている



C

曾根 麻矢子 (チェンバロ) Mayako Sone

桐朋学園大学附属高校ピアノ科卒業。ピアノを寺西昭子、チェンバロを鍋島元子、スコット・ロスの各氏に師事。1986年ブルージュ国際チェンバロ・コンクール入賞。フランス、イタリア等のフェスティバル参加、現代舞踊家サンチャゴ・サンペレとのコラボレーションなど多彩な活動を開始。最新盤「J.S. バッハ: ゴルトベルク変奏曲」まで14枚のCDをリリース。96年第6回出光音楽賞、97年飛騨古川音楽大賞奨励賞受賞。2011年よりスタートした「チェンバロ・フェスティバルin東京」では芸術監督をつとめている。上野学園大学特任教授。



M S C

チョー・ソンヨン (チェンバロ) Sungyun Cho

韓国、ソウルで音楽の勉強を始め、ソウル芸術高校とヨンセイ大学に学びカク・トンソン教授にオルガンを師事。その後デン・ハーグ王立音楽院でジャック・オッホにハープシコードを師事、栄誉賞付き最高得点で卒業した。彼女の卒業試験での演奏はその年の全学最高の演奏の一つに選ばれた。在学中からヨーロッパ各地でソリスト、通奏低音奏者として活躍。卒業直後よりソリストとしての活動を開始し、バッハのゴールドベルク変奏曲でスペインツアーを行った他、ベルギー、オランダなどで演奏し、今後は韓国、日本、オーストラリア、ボリビアなどでの演奏が予定されている。また、フランスやスペイン、韓国、日本などの音楽祭に招待され、最近では紀尾井ホールでブランデンブルグ協奏曲第5番などを演奏、室内楽や協奏曲などで寺神戸亮と頻りに共演を重ねている。韓国でマスタークラスやレクチャーを行う他、デン・ハーグ王立音楽院ではジャック・オッホの助手を務めている。



C

寺神戸 亮 (ヴァイオリン) Ryo Terakado

1961年ボリビア生まれ。桐朋学園大学に学び、ヴァイオリンを久保田良作氏に師事。在学中1983年に日本音楽コンクール第3位入賞、1984年同大学を首席で卒業すると同時に、<東京フィルハーモニー交響楽団>にコンサートマスターとして入団(当時、最年少)。しかし、在学中より興味を抱いており、有田正広氏等と演奏活動も始めていたオリジナル楽器によるバロック演奏に専心するために1986年に同団を休団(後に退団)、オランダのデン・ハーグ王立音楽院に留学、シギスヴァルト・クイケンのもと研鑽を積んだ。同院在学中から演奏活動を始めると、直ちにその才能は広く認められるところとなり、<レザール・フロリッサン>(フランス)、<シャペル・ロワイヤル>(フランス)、<コレギウム・ヴォカール・ゲント>(ベルギー)、<ラ・プティット・バンド>(ベルギー)などヨーロッパを代表する古楽器アンサンブルやオーケストラのコンサートマスターを務めた。現在<バッハ・コレギウム・ジャパン>コンサートマスター。ソリストとして<ラ・プティット・バンド><レザール・フロリッサン><バッハ・コレギウム・ジャパン><東京バッハ・モーツァルト・オーケストラ(有田正広主宰)><アルテ・デイ・ソナトリー>(ポーランド)などと協奏曲を共演。現在、デン・ハーグ王立音楽院にて後進の指導にあたっている。また、ブリュッセル王立音楽院、東京芸術大学、福岡古楽音楽祭、韓国延世大学等に招かれ、マスタークラスやオーケストラ指導なども行っている。2007年より桐朋学園大学の特任教授に就任。ベルギー、ブリュッセル在住。



M C

前田りり子 (トラヴェルソ) Ririko Maeda

モダン・フルートを小出信也氏に師事。高校2年の時、全日本学生音楽コンクール西日本大会フルート部門1位入賞。その後バロック・フルートに転向し桐朋学園大学古楽器科に進学。オランダのデン・ハーグ王立音楽院の大学院修了。有田正広、バルトルド・クイケン各氏に師事。1996年、山梨古楽コンクールにて第1位入賞し、1999年、ブルージュ国際古楽コンクールで2位入賞(フルートでは最高位)。バッハ・コレギウム・ジャパン、ラ・フェート・ギャラント、オーケストラ・リベラ・クラシカ、ソフィオ・アルモニコなど、各種演奏団体のメンバーとして演奏・レコーディング活動をしているほか、日本各地でしばしばリサイタルや室内楽コンサートを行っている。現在、東京芸術大学、上野学園大学 非常勤講師。



M C

ダニエル・キュイエ (ヴァイオリン、音楽監督)

Daniel Cuiller

アンサンブル ストラディヴァリア 音楽監督、ナント国立音楽院元教授、1982年フランスでバロック音楽のアンサンブルを結成後、1987年<ストラディヴァリア・ナント・バロック・アンサンブル>を、ジョスリーヌ・キュイエ(チェンバロ)と再編成。ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン(熱狂の日音楽祭)で2回来日。フランス随一のバロック・アンサンブルで、ヨーロッパを中心に活発な演奏活動を行っている。1992年から2002年まで、バロック・ヴァイオリンの教授として、パリ国立高等音楽院や、サブレ古楽アカデミーに於いて教鞭を執る。



C

ストラディヴァリア・ナント・バロック・アンサンブル

Stradivaria - Ensemble Baroque de Nantes

ヴァイオリン奏者ダニエル・キュイエが率いるナントのバロックアンサンブル、ストラディヴァリアは1987年からバロック時代に活躍した音楽家たちの楽曲を演奏し続け、17、18世紀の楽曲をその長い歴史や遺産価値に重きを置いて活動を続けている。ストラディヴァリア・サウンドの一番の味は弦楽器。豊かで広く、柔らかいその音は楽曲の流れに多彩なハーモニーを生み出しており、大勢の観客から賞賛を受けている。ストラディヴァリアはフランス国内のサブレ、ポントワーズ、リヨンの各バロック音楽祭、パリのシテ・ドゥ・ラ・ミュージック、そしてラ・フォル・ジュルネで高い評価を得ており、海外でもカナダ・モントリオールのバロックフェスティバル、オランダのユトレヒトやアジアでもいくつかのコンサートに参加した。



C